

華麗なるハプスブルク帝国——その永遠の光芒（七）

待望のプリンス・ヨーゼフ二世の幼児教育

富山典彦

六歳で出逢ったときから恋い焦がれていたロートリンゲン公フランツ三世Ⅱシュテファンと結婚できたからには、ともかく一日も早く男の子を生まなくてはならない。それがマリアⅡテレジアに与えられた唯一の選択肢なのである。結婚したのは一七三六年二月十二日で、最初の子マリアⅡエリーザベトの生まれたのが一七三七年二月五日だから、ハネムーンベイビーではなかったとしても、出産は順調だ。次女マリアⅡアンナは、長女の生まれた翌年、一七三八年十月六日に生まれているから、いわゆる年子である。三女マリアⅡカロリーネの生まれたのは一七四〇年一月十二日と、あの美少女マリアⅡテレジアは次々と出産

し、まだ二十三歳の若さで、すでに三人の女の子の母親になっっている。X染色体とY染色体、男女の差はただそれだけのことなのだから、男の子と女の子の生まれる確率は五分五分のはずなのに、なかなかそうはいかないのが現実だ。

しかし、長女マリアⅡエリーザベトは、一七四〇年六月七日、四歳のときに死んでいる。可愛い盛り子どもを亡くすという悲しみを、マリアⅡテレジアは二十三歳の若さで経験したのである。これで娘は二人になってしまい、まだ男の子は生まれぬ。悲しんでいないで、次の子どもを出産に励むしかない。しかも、次こそは男の子であってほ

しい。きっとマリア＝テレジアは、自分の名前の聖母マリアに心の底から祈ったことだろう。

この一七四〇年という年は、マリア＝テレジアにとって、わが子を亡くしたことよりもっと衝撃的なことが起こった年でもある。十月二十日に、父の皇帝カール六世が亡くなったのである。国事詔書により、マリア＝テレジアがハプスブルク家の家領をすべてまとめて相続することが認められていたはずだったが、プロイセンのシレジア侵攻を皮切りにして、オーストリア継承戦争に突入することになる。

カール六世が死の床にあつたとき、妊娠していたマリア＝テレジアは、その死に立ち会うことができなかつた。そのお腹のなかの子どもこそが、のちのヨーゼフ二世世だったので、カール六世はそれを知ることなく死んでしまったのである。

翌年の一月二十五日には、三女マリア＝カロリーネが、一歳の誕生日を迎えてすぐに死んでしまい、三人の娘はこの時点で一人になってしまう。三月十三日に長男が生まれたときの喜びがどれほどのものだったか、想像にあまりある。三月十二日の夜中の十一時に陣痛が始まり、翌日の午

前二時に無事、待望の男の子が誕生したのである。そしてその日のうちに洗礼を受ける。それは、ちょうどこのとき、風雲急を告げる事態の最中だったからだ。

オーストリア継承戦争は、本来、ハプスブルク家の家領をめぐる、マリア＝テレジアよりかなり年上の従姉たちがそれぞれの取り分を要求して起こるはずのもののだが、それとはまったく関係のないプロイセン王フリードリヒ二世が、突如シレジアに侵攻してきたことから始まる。まだ何の準備もできていなかったハプスブルク家の隙を突いたプロイセン軍は、一七四一年一月三日、シレジアの首都ブレスラウに無血入城する。

父の死、娘の死、そして長男の誕生と、目まぐるしく運命の変転を繰り返すマリア＝テレジアだったが、四月三十日にオーストリア軍はモルヴィッツでプロイセン軍に手痛い敗北を喫する。何の準備もしていなかつたブレスラウ無血入城とは違って、今度は、大ハプスブルク帝国と、当時はまだ小国だったプロイセン王国との戦いだったから、この敗北の意味は大きかった。いや、大きすぎた。「ハプスブルク家は終わった」という、あるフランス人の枢機卿の言葉が、妙に現実味を帯びてくる。

ハプスブルク帝国とは、ハプスブルク家の家領の集合体につけられた呼称であり、その実態としては、オーストリア大公・ハンガリー王・ボヘミア王というこの家領にある「国」の主の称号と、これまで事実上世襲化してきた神聖ローマ皇帝の称号、それらをハプスブルク家の当主が独占している、というものである。もちろんここまでくるには、さまざまな紆余曲折があったが、マリア・テレジアの父カール六世は『国事詔書』によってそれを法制化したと言えるだろう。家領をまとめて相続することになっていたマリア・テレジアだったが、ハンガリー王とボヘミア王は、それぞれ別に戴冠式を行っている。

マリア・テレジアがとハンガリー王国の当時の宮廷所在地のプレスブルク、現在はスロバキア的首都ブラティスラヴァで女王ではなく「ハンガリー王」の戴冠式を行ったのが、一九四一年六月二十五日。このとき、プロイセンがフランスと同盟をしたという知らせを受け、ハンガリー王になったばかりのマリア・テレジアはウィーンに帰還する。

このままでは、ようやく授かった男の子、のちのヨーゼフ二世の将来がない。一七四一年九月十一日、ハンガリー王の象徴である聖イシュトヴァーンの王冠をかぶり喪服を

着たマリア・テレジアは、ハンガリーの議会に登場して、涙ながらに次のような演説をしたのである。腕にはもちろん、生まれて間もないヨーゼフを抱いている。

ハンガリー王国、われらが臣民、われらが子どもたち、われらが王冠のために。すべてを捨てて、忠実なハンガリーとその勇敢さに助けを求めます。今私たちが置かれている大きな危機のなかで、子どもたちのため、臣民たちのため、そして王国のために、すべてをなすことをお願いします。

これには、ハンガリーの貴族たちも感激し、ハンガリーの貴族であるバルファイ伯ヨーハンはサーベルを抜き、*Viam et sanguinem pro majestate vostra*（「わが君のためにわが生命と血を」）と叫んだと伝えられている。ハンガリーの公用語は、ドイツ語でもハンガリー語でもなく、ラテン語だったのである。

こうして、マリア・テレジアはハンガリーの助力を得て、オーストリア継承戦争を戦い抜くのである。その一方で、次々と子どもを生み続け、「女帝」としての風格を身

にまよっていくのだが、さて、長男ヨーゼフをどう教育するか、という問題があった。この子こそ、間違いなくハプスブルク帝国の後継者になる運命だからだ。ハプスブルク家のマリア・テレジアとロートリンゲン家のフランツ・シユテファンシユテファンの長男、ということは、この子からはハプスブルク・ロートリンゲン家の新しい歴史が始まるのである。

この当時の幼児教育は、まず、母親代わりにありとあらゆる面倒を見るアーヤという女性に委ねられる。これは、ヨーゼフの姉たちのアーヤのマクシミリアーナ・フォン・ベルプト伯爵夫人であった。ただ、「子どもたちの躰によくない」という理由で、一七四四年に解雇され、マリア・カタリーナ・フォン・ザウラウ未亡人に代わった。「躰によくない」というのはどういふことなのだろうか。ザウラウ夫人が、神への愛と畏れをもった敬虔なキリスト教徒だったということだから、伯爵夫人の方は、それが足りなかったのかもしれない。

その翌年、ヨーゼフの父親が無事に神聖ローマ皇帝フランツ一世として戴冠し、あとは長男ヨーゼフの成長を待つのみ、ということになった。ハプスブルク帝国はこのあと

も、戦いの日々明け暮れることになるが、とりあえずは、まだ幼い長男をハプスブルク帝国の跡取りとしてふさわしい人物に育てることが必要だ。マリア・テレジアの場合とは違って、間違いなくこの長男がハプスブルク家の家領をすべて相続し、さらには、ハプスブルク家が編み出した神聖ローマ皇帝の事実上の世襲化を守っていかなくてはならないのだから。

フランツ一世の戴冠を秘かに援助したプロイセン王フリードリヒ二世は、この戴冠式の翌年に、オットー・クリストフ・フォン・ボーデヴィルスという人物をウイーンの宮廷に送り込んでいる。どういう名目だったかは別にしてお要するに、ウイーンの宮廷の内情を探り、それをベルリンに伝えるスパイの役目を果たす人物ということである。

この宮廷スパイはその年の六月二十九日に、五歳のプリンスの様子を報告している。それによるとこのプリンスは、「勉強よりも軍事に興味があった」ということになっている。五歳のとき、その子の持つて生まれたものが表れるというから、ヨーゼフはすでにこのときから、その才覚を示していたということになる。

将来彼は、プロイセン王フリードリヒ二世にならって啓

蒙専制君主ヨーゼフ二世になるのだから、「梅檀は二葉より芳し」の言葉通りということだろうか。もともと、そのフリードリヒ二世は、幼い頃は音楽や芸術を愛していて、軍事大国になろうとしていたプロイセンの後継者にはふさわしくなかったことを考えると、五歳で人生のすべてが決まるほどの人生は単純ではないということだ。

翌一七四七年三月二十二日の報告によると、「年齢の割に体は大きくないが、体格は良くて美しい。顔立ちはいい。母親に似た眼をしていて、それ以外は父親に似ている。印象は気高く高慢で、性格もその通りである」という。母親のマリア・テレジアもかつてはヨーロップ一の美女と言われ、父親のフランツ一世はそのマリア・テレジアが六歳のときに一目惚れをするほどの美少年だったから、まあ、どちらに似ても問題はないだろう。ただ、「気高く高慢」というのは、どう評価すればいいのだろうか。しかし、卑屈で他人の顔色ばかり気にしているなどということならば、ヨーロップをフランス王国と二分する大帝国の皇帝にはふさわしくあるまい。

少年ヨーゼフは、ハプスブルク家にとって宿敵だったフランスには、あからさまな敵意をもっていた。だから、宮

廷人として必須のフランス語を習うのが嫌で、フランス語はまったく話さなかったという。軍隊を愛し、将校とその妻にだけ声をかけたということも伝えられている。

これには、父親フランツ一世も心配したということである。マリア・テレジアの父であるカール六世が死んだ直後に、プロイセン軍がシレジアに攻め込んできたとき、当時まだ神聖ローマ皇帝になっていなかったフランツ・シユテファンは妻のマリア・テレジアに、シレジアは諦めた方がいいと進言している。そもそも、マリア・テレジアとの結婚のために「デビュウ戦」として企画されたトルコとの戦いで敗北し、軍人としての無能をさらけ出してしまったフランツ・シユテファンのことだから、長男の戦争好きは困ったものだっただろう。

「女帝」と呼ばれるマリア・テレジアも、夫の制止を振り切ってプロイセンのフリードリヒ大王とは戦い続けたが、結局のところは母親としての慈愛もあり、晩年は平和主義者になったようだから、夫の死後に自分の共同統治者にした息子ヨーゼフ二世とはさまざまな確執があったことも事実である。

ヨーゼフ二世は、要するに一種の天才であり、七歳半の

ときに軍制改革者として知られるハウクヴィッツ伯爵に、こんなことを言ったのである。「あなたの軍制改革には賛成できない」と。これも、プロイセンから送られてきた密使の報告書にある。

そのかわり気前は良くて、シェーンブルン宮殿で散歩しているとき、貧しい兵士たちの姿を見かけると、彼らにお金をあげたということも伝えられている。なお、ハプスブルク家の夏の離宮として知られるシェーンブルン宮殿は、マリア・テレジアのときに現在の姿になったのだが、一部は市民も出入りできるようになったから、貧しい兵士もここに姿を見せたということである。

ヨーゼフ二世は生まれたときからハプスブルク家の君主になることが決まっていたが、本人もそれを強く意識していた。何かと他人に命令したが、人の話など聞く耳を持たない。勉強にしても、無駄だと思われることは学びたくない。よく言えば、生まれながらに啓蒙専制君主だったということかもしれない。

ヨーゼフ二世の性急な改革は、結局のところ失敗だった、ということはあるが、最近の評価のなかに、間違っただけではなかったというものもある。このあたりのこと

について、筆者が評価することはできないが、「三つ子の魂百まで」とでも言うてごまかしておくことにしよう。

話を、ヨーゼフ二世の幼児教育に戻すことにしよう。幼い頃はアーヤがあてがわれたが、「男女七歳にして」は洋の東西を問わないらしくて、六歳半でアーヤではなく男性のアーヨに代わり、女性から遠ざけられることになった。アーヨの第一候補としては、ヨーハン・ヨーゼフ・ケーヴェンヒュラーがその任務を依頼されたが、それを断ったというから、ヨーゼフ少年はそれほど難しかったというところだろう。

一七四七年十月に、アーヨをカール・パチャール二将軍にすることが決定され、翌年の十月九日に、ブリュッセルから呼び戻され、十二月九日から将軍はその任務に就き、妻とともにホーフブルクに居住することになった。決定から就任まで、かなりの時間がかかっている。それから、ブリュッセルは当時、オーストリア領ネーデルラントであり、パチャール二将軍はそこに派遣されていたということである。

この年にまた、プリンスの身の回りの世話をするために五人の侍従が任命されている。プリンスを朝七時に目覚め

させるというのが、彼らの一日の始まりだ。プリンスを着替えさせて、朝の祈りをさせる。朝食後のミサに同伴し、昼食と夕食の世話をする。プリンスが眠ってはじめて、彼らはその仕事から解放される。甘やかされたプリンスの世話は、何かと大変だったことだろう。しかもこのプリンスは、夜になったら一人で外に出ていたということである。そのほかに、コックが二人にソムリエ一人がついていた。歯医者、火曜日と金曜日の七時半に、プリンスの歯磨きをした。

ヨーゼフ二世の誕生日は三月十三日だが、この誕生日とならんで大事な日は名前の日、つまり聖人ヨセフの日だが、これが三月十九日である。三月半ばは早春の輝く光のなか、プリンスのお披露目の盛大なお祭りにはビツタリだった。

二歳半のとき、プリンスははじめてハンガリーの衣装を着せられた。なにしろ、生まれて間もないヨーゼフを抱いて、マリア・テレジアはハンガリーの議会でマグナートたち、この子のために力を貸してくださいと懇願したのだから、ハンガリーはハプスブルク家にとって特別の王国である。

六歳半のときにはじめて軍服を着て、七歳半のとき、つまり一七四八年十二月十日には馬に乗ってパレードした。これには、軍隊好きのプリンスもおおいに喜んだことであろう。

一方、宮廷人としての必須科目についてはどうだったかという、五歳のときにバレエを習い始めている。こちらにも才能があつたらしくて、六歳で上手に踊つたということである。もうひとつ音楽については、映画『アマデウス』で実物そっくりのヨーゼフ二世が出演しているのを見れば、ここであまり言う必要もないだろう。一七四八年五月十三日の母親の誕生日に、七歳のプリンスはメヌエットを披露している。

しかし、フランス語のほうは、六歳のときに母親の名前の日にフランス語でお祝いの言葉を述べたのだが、何を言ったのかほとんどわからなかったということである。「鼻でしゃべった」と言われているが、フランス語の鼻母音に引つ張られすぎたのだろうか。

勉強のほうは、ヨーハン・バルタザール・フォン・アンテスベルクがつくつた、ヨーゼフひとりのためのABCの本が残っている。ドイツ語の文法を習い、祈りの言葉を

覚え、算数を学ぶ。日本でもかけ算の九九を覚えるが、ドイツ語では *einmalens* といい、現在では小学校二年生の必修科目になっている。これが覚えられなければ、小学校二年生にして留年ということになるが、ヨーゼフはそんなことにはならなかった。九九を覚えるとともに、四則演算もこのプリンスは楽にこなしたようだ。

一七四七年には、アウグステイーナ教会の聖歌隊指揮者フランツ・ヨーゼフ・ヴェーガーがプリンスの勉強のすべてを引き受け、これらのことを逐一指導したのである。さらに、一七四九年一月二十日から、イエズス会司祭のイグナツ・ヴァイクハルトがラテン語と文学を、イエズス会士イグナツ・ピッターマンが歴史と地理を教えた。イエズス会がプリンスの教育に関わっていることは注目していいだろう。プリンス自身は数学が好きで、先生はヨーハン・バプティスト・ブレカン大佐だった。数学が、商売というよりは軍事に必要だったことは理解できる。だからこそまた、ヨーゼフの好きな科目でもあったのである。

プリンスの勉強全般を引き受けていたヴェーガーは、遊びながら学ぶ工夫をしたことだが、そのヴェーガーは一七五一年七月に死亡する。そのあとを継いだのは、

ヨーハン・クリストフ・バルテンシュタイン次官だった。ラテン語の勉強はいつの時代にも困難をきわめるが、カエサル伝には興味をもったということで、その理由もよくわかる。ラテン語の文法を一通り終えたあと、詩学と修辭学に入っていく。それは、一七五三年十月まで続いた。

歴史も、重要な帝王学のひとつだが、旧約聖書から始まり、アッシリアやペルシャ、それにギリシャ、そしてローマの歴史を学ぶ。プリンスはまた地理に興味を持ち、とくに測量術はしっかりと学んだ。そして、歴史と地理の勉強の行き着く先にはもちろん。ハプスブルク帝国があり、ヨーゼフ自身は「オーストリア帝国は、多くの異なる、部分的には離れた地域の、異なる言語と習慣と法律と宗教をもったいくつかの国民から成り立っている」と的確にまとめている。

ハプスブルク帝国におけるラテン語教育の重要性は、ハンガリーの公用語でもあるからで、マリア・テレジアがかつてハンガリーの議会でラテン語で演説したことはすでに述べた。ところで、そのラテン語で何を読むかだが、プリンスはラテン語でもに修辭学を学んだ。修辭学はまた自由七学芸のひとつでもあるが、「弁論術の最終目標は他人

を言い負かすこと」として、ヨーゼフも気に入ったようだ。

また、このラテン語で自然法と諸国民の権利を知ること、帝位継承者にとって大事なことであり、アリストテレスの倫理学と政治学も学んだ。そして、マリア・テレジアが設立した学校であるテレジアースムの生徒と競争させ、生まれつき負けず嫌いだっただヨーゼフを刺激した。

歴史の授業では、マクシミリアン一世からの近代史を学んだ。ヨーゼフ二世が大好きだった戦闘ではなく、条約や和平交渉や外交といったことが歴史の中心になる。ヨーゼフ二世にとって、祖先たちがこれまでに行ってきたことだ。さらに、広大なハプスブルク帝国領内のさまざまな地方の歴史も重要だが、これはまさに複雑怪奇なものだった。もちろん、神聖ローマ帝国の歴史や、フランス王国などの他国の歴史も必要なのだが、どうやらこれはいろいろな秘密事項を含んでいるらしくて、適当な教科書がなかったということである。

もちろん、当時の大学の四学部のひとつ法學も、将来の皇帝にとって必要な学問であり、その他の学問については、それを学ぶために適切な先生が選ばれた。

一七五一年十月十三日のバルテンシュタインの報告によれば、一種の天才と呼ばれたプリンスは十歳ですでにその「優秀さ」を發揮していた。つまり、数学や地理学や戦争学のような「自然科学」には興味を示したが、伝統的なや過去のものは拒否したということである。バルテンシュタイン自身の意見によれば、前時代の支配者たちの失敗を学ばせるとよいから、それらもおおいに学ぶ意味があるということ、そういうことならばプリンスもおおいに興味をもったことだろう。

ここで、十歳のプリンスの日課がどんなものだったか、あげておくことにしよう。

六時四十五分 起床と祈禱

七時三十分までに着替え

七時四十五分までに朝食

八時 ミサ

九時三十分までラテン語

十五分休憩

十時三十分までヴァイクハルト神父の歴史の授業と十

五分間のドイツ語読書

少し休憩

十一時三十分までシユタイナー師と習字（月曜・木

曜・土曜は乗馬）

昼まで休憩

十四時まで食事と会話

十五時まで地理

十六時まで、月・水はホラー神父、火・木・土はブレ

カンの授業

十六〜十七時 ラテン語と歴史

十七時三十分まで休憩

十八時までロザリオの祈り

十八時三十分 月・木はロイターによる音楽の授業、

水・金・土は舞踏の授業

二十時までおしゃべり

二十時三十分 夕食

二十一時十五分までビリヤード、夜の祈りと着替え

二十一時四十五分 就寝

とまあ、こんな具合だ。こういう生活を毎日毎日繰り返かえしていったのだから、帝国を将来背負うことになるプリンス

も、なかなか大変である。

一七五一年にオットー・フォン・シユラッテンバッツハ伯爵を「ご学友」にして、いっしょに学ぶことになる。そして一七五二年一月二十四日には天文学と地理の試験、二月二十一日には歴史とラテン語の試験、三月二十七日にはその他の科目の試験、五月七日には地理の試験と、一部両親立ち会いのもとに、試験が実施される。「ご学友」のほうが試験の成績がいいということになって、プリンスはさらに勉強を続けさせられる。

歴史に地理、そしてラテン語とフランス語。宗教の授業ではカトリック要理や宗教的美徳と義務などを学ぶ。得意の数学と幾何学と戦争学では、課された難問を解かなくてはならない。

ラテン語の授業が終わったら、今度はイタリア語だ。一七五二年九月十四日に、宮廷図書館のマルティネスがイタリア語の先生に選ばれる。ラテン語の俗語ともいえるイタリア語は、プリンスには難題ではなかったようだ。それに、オペラはイタリア語であるし、宮廷音楽家も基本的にイタリア人だったはずだ。

ヨーゼフⅡフランツ神父が、修辞学と哲学と物理学を担

当したが、イエズス会士は多くの知識をもっていたようだ。フランツ神父は東洋学者でもあり、有名な数学者でもあり、天文学とも関わっていた。一七四八年七月二十五日に日蝕がイエズス会の天文台で観察されているが、皇帝一家はレヒナー神父の指導のもとに、シェーンブルン宮殿で観察している。望遠鏡の前に立っている父親フランツ一世の絵が残されているが、母親はともかく、父親には興味津々の現象だったはずだ。

プリンスも物理学に興味を示したので、父親はさっそく物理学教室を開いている。自然史にも興味を示したプリンスに、父親は自分の博物標本陳列室でジャン・ド・ベルーの説明を聞かせている。ハプスブルク帝国のプリンスともなると、当時超一流の先生と設備を自由に利用できたわけで、幼少時代にヨーゼフと似たような趣味を持っていた筆者としてはただただ羨ましいかぎりである。

ドイツ史はアロイス・レポリーニが担当したが、この名前からいってこの先生はイタリア系の人である。トスカナ大公国の大公は父親のフランツ一世が兼ねていたから、その視点からドイツの歴史を眺める必要もあつたのだろうか。

ともかく、次々といろいろな先生が呼ばれてプリンスの指導に当たった。一七五三年十二月からプリンスは新しいカリキュラムで勉強することが決定され、エマニュエル・ド・ポアル侯爵がその担当となる。こちらは、その名前からいうとフランス系だが、父親のフランツ一世はそもそもロートリンゲン公、フランス語で言えばロレーヌ公だから、フランス系にも通じていたのであろう。教育にも国際性が表れている。

一七五四年の復活祭から新しいカリキュラムが始まる。春から新年度というのなかなか興味深い。新しいカリキュラムで教えられる科目は、形而上学、論理学、修辞学、自然法と民族法、市民法と教会法、ドイツ語と歴史、エチケツトと宮廷行事、宗教ということ、三月十二日にこのカリキュラムが完成し、四月十四日の復活祭から始まった。

新カリでの試験は、早くもこの年の秋、十月八日の歴史から始まり、翌一七五五年五月二十三日と十月十四日にも試験が行われた。一七五五年五月二十八日の論理学の試験はこれよりさらに難しく、最も難しかったのは八月二十七日の哲学・形而上学・存在論の試験だった。これらは、ド

イツ語ではなく、ラテン語で答えなくてはならなかったのである。

十月二十七日の倫理学の試験でヨーゼフ神父による哲学の授業は終了し、それ以後は法学が中心となる。テレジア・アースム教授のクリスチアン・アントン・ベックが一七五五年末に着任している。一七五六年二月二十三日に自然法と民族法の試験に合格したかと思うと、翌年には教会法と領邦法公法の試験がある。

一七五九年三月十三日には、プリンスもとうとう成人となり、三月二十九日の歴史の試験をもって、ようやく勉強期間は終わった。しかし、これからがまた大変だ。机の上での勉強から、まさにいま流行のインターンシップということになる。帝国各地の知識を实地視察で得る必要があるのだ。五月から政府の仕事を見て、議会に参加したり書類を見たりする。一七六一年八月七日の帝国参議院には、議員でもないのに特別に同席させられる。もちろん、帝国の後継者だから、誰も反対することはあるまい。

これでもう一人前ということだが、その前年の一七六〇年、ヨーゼフはイザベラ・フォン・パルマと結婚している。もうこれで本当に成人ということである。政略結婚で

あったことは間違いないが、ヨーゼフもイザベラの魅力の虜にはなったようだ。ただ、このイザベラにはレスピアン
の疑惑があるのだが、それはともかくとして、一七六二年三月二十日にテレジアという名前の娘が生まれているから、まあふつうに夫婦関係があったということではある。

ともかく、男の子が生まれるまでは、たとえその疑惑が本当のことだったとしても頑張るしかないのだが、その後、二人の子どもは死産してしまふ。イザベラは体質的に妊娠に耐えられなかったのかもしれない。そして、当時流行していた天然痘であっさり死んでしまふ。結局ヨーゼフはのちに再婚させられるものの、今度はまったく気に入らない女性だったために、こちらには子どもができず、あらたに誕生したハプスブルク・ロートリンゲン家も危機を経験することになるが、そのことについてはまた別の稿に譲ることにしよう。

一七六四年に、ヨーゼフはドイツ・ローマ王に選出され、ここで晴れてヨーゼフ二世となる。父親の皇帝が在位中に、息子を王に選ばせておくという、ハプスブルク得意の選挙王制の世襲化の手法だ。ただ、翌一七六五年に、父親であるフランツ一世がインスブルックで思いがけず死ん

でしまい、ヨーゼフ二世は神聖ローマ皇帝ヨーゼフ二世になるが、さて、後継者はどうするか。結論から言うと、このときにインスブルックで結婚式を挙げ、トスカナ大公となった弟レオポルトの長男フランツを指名するのだが、まだ結婚式が終わったばかりで、フランツは誕生していないのだからそれはまだ未知なる未来の話である。

待望の帝国後継者ヨーゼフの少年時代を振り返ってみると、最初は自由に育てられその天才性を発揮していたが、帝王学を徹底的にたたき込まれ、そのため宗教嫌いになってしまう。帝王学にはいわゆる勉強だけではなく、宮廷の儀式も含まれているのだが、ヨーゼフはこれも嫌って、本当に帝王になったときには、新年の儀式だけに限定したという。理屈に合わず、金のかかることを嫌ったのであり、それは啓蒙専制君主といわれる皇帝ヨーゼフ二世の政策の根幹をなすのである。

母親の宿敵であったプロイセン王フリードリヒ二世のまねをして、ヨーゼフ二世は軍服が好きだったから、肖像画にもその姿が描かれている。古代ギリシャやローマの歴史ではなく、最近の歴史を学ぶことが好きだったのは、まさに自分こそがその歴史の「次」をつくっていく使命感に充

ちていたからであろう。

ハプスブルク帝国を近代国家にしていくための大胆な改革が行われるのは、もう少し先のことになるが、一言でこの改革を評価するとするならば、ヨーゼフ二世は生まれてくるのが少し早すぎた、ということになるだろう。